

幼児の宗教心について

——キリスト教信仰からの一考察——

今 関 公 雄

は じ め に

本学の児童教育学科専攻科児童教育専攻では、特色ある学びとして総合科目「子ども」を開講している¹⁾。私は、主専攻が社会福祉であるが、同時にキリスト教教師でもあるため²⁾、今回は発題テーマとして「子どもの宗教性」が与えられ、この度その講義を終了した³⁾。折角の機会でもあるので、主題を標記に改め、講義を再現する形式で、この間の課題などについて一考察を試みることにした⁴⁾。

1 こどもさんびか考

教会学校で慣れ親しみ、よく歌われる「こどもさんびか」に、12番 ばらばら おちる⁵⁾ がある。その歌詞は、次のごとくである。

1. ばらばらおちる 雨よ雨よ
ばらばらばらと なぜおちる
かわいたつちを やわらかにして
きれいな花を さかすため

2. ちらちらおちる 雪よ雪よ
 ちらちらちと なぜおちる
 葉のない枝に あたたかそうな
 まわたのふくを きせるため
3. きらきらひかる 星よ星よ
 きらきらきと なぜひかる
 たびする人が くらい夜にも
 まよわずみちを いけるため
4. ちゅんちゅんうたう 鳥よ鳥よ
 ちゅんちゅんちゅんと なぜうたう
 きれいな歌で 世界の人に
 み神の愛を しらすため

この歌詞が告白し指し示す心的世界は、本テーマを考える際に、筆者が改めてその核心部分として示唆されたものである。つまり、幼児の思考の特質が「直観的神概念」にあるとすると⁶⁾、この歌は自然のさりげない現象の中に、神の配慮と恵みを唱いあげていると思うからである。

雨の降る理由を、きれいな花を咲かすためとし、雪の降るそれを葉のない枝にあたたかい真綿の服を着せるためとし、光る星は旅人が暗い夜道にも迷わず行けるためとし、鳥のさえずりは世界中の人にきれいな歌声で御神の愛を知らすためであるとしている。ここでは、大人の想いがいわゆる自然法則や因果律的な原因究明に傾きがちになるとき、幼児の宗教心が神の御手のはたらきにおける自然の営みとの意味づけの中で豊かに耕されることを示していると考えられるのである。キリスト教信仰の視点からは、天地万物の創造主なる神が、人間を含めた全被造物を統べ治め、それぞれに固有の意義を付与されているとの信仰告白の表明とも解されるのである。

2 宗教と宗教心について

広辞苑（第四版）では宗教について次の説明が為されている。「神または何らかの超越的絶対者、或いは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事。また、それらの連関的体系。帰依者は精神的共同社会（教団）を営む。アニミズム・自然崇拜・トーテミズムなどの原始宗教から、呪物崇拜・多神教などの形態を経て、今日の世界的宗教すなわち仏教・キリスト教・イスラム教などに至るまで、文化段階・民族などの違いによって多種多様。多くは教祖・経典・教義・典礼などを何らかの形でもつ。」宗教心については次のごとくである。「神または仏或いは超越者に対する帰依から生ずる敬虔な心。」

本稿では、キリスト教信仰が、イエス・キリストを我が救主と信仰告白する自覚的前段階としての幼児の宗教心に着目する。ここでの課題は、幼児期の価値意識が想像的・呪術的・直観的・神概念と信仰や父親・母親像と神の同一視という特質をふまえたとき、どのような事柄や関わりが肝要であるかという点になる。

3 子どもの独自性

ここでは、アラブのある詩句を手掛かりとして考えてみる。⁷⁾

おまえの子どもたちは、おまえの子どもではない　彼らはおまえを通して生まれた、しかしおまえからではない　彼らはおまえのもとにいる、だがおまえのものではない　おまえは彼らに愛を与えることはできる　しかしおまえの考えは与えられない　彼らには彼ら自身の考えがある　おまえは彼らの住む家を建てるかもしれない　しかし彼らの魂の家はつくれない　彼らの魂はおまえの知ることのない　明日の家に住むのである　おまえが彼らと同じになろうとところみるのはいい　しかし彼らをおまえと同じにしよ

うとは望まぬがよい　人生は逆もどりさせることはできない　明日は昨日
の中にとどまてはいない　おまえは弓だ、そしておまえの子らは　それ
につがえる生きた矢だ　おまえの弓の描くカーブを　守護の手中の喜びの
意味とするがいい

ここでは、幼児を始めとして、子どもが大人を単に小さくしたものではなく、本質的に独自の存在であり、殊に未来指向の存在であることが、見事なまでに表明されている。

すると、極論に走れば、子どもの育ちをほとんど子ども自身の自己教育能力に委ねる立場が成立することになる。「親の後姿を見て子どもが育つ」とは、古来から云われてきている。たしかに、無意図的な教育の力が大きいことは確かである。しかし、乳幼児期が人間的成熟や人格形成において、未分化であり非自覚の成長段階であることを考えるとき、親や養育者などの意図的で自覚的な関わり的重要性は忘れられてはならないと考えられる。

キリスト教信仰の視点からは、この間の親の心情を表明するものとして、次のような幼児洗礼時の祈願をあげることができよう。⁸⁾「ここにわたしたちの子どもがおります。この子はしかし、わたしたちが自分に与えたものではなく、あなたより授かったものです。この子どもはわたしたちの所有物ではありません。わたしたちは受託者にすぎません。それゆえあなたに、この子どもを護り、導き、祝福してくださるようお願いするしだいです。どうぞこの子のそばについていてやってくださいますよう、この子のこの世の定めの中にいてやってくださいますよう、ここにお願いするものであります。」

4 宗教教育の目的

前述の視点に立つとき、いわゆる宗教上の教義などを知的レベルで教え込むのではなく、もっと原初形態での宗教教育が考えられる。その核心は、既述の幼児期の価値意識の特質である想像的・呪術的・直観的・神概念と信仰や父親・

母親像と神の同一視をふまえたものとなる。

この間の事情を考慮して、その宗教教育の目的を考えると、その概要は、以下の通りになる⁹⁾。「子どもを愛する能力をもつ人間、他人のために献身できる人間に育てることだ。大切なのは、子どもが自由で自立的な人間となり、他からの借り物や受け売りではない良心を発達させ、自己の良心を検証する尺度を見いだすことである。いたずらに不安のとりことなったり、信頼の心を失ったりすることなく、自己の道に確信をいだく人間になることである。物ごとを自分の頭で考え、情性で生きてゆくということのない者になること、さけがたい苦難苦痛に耐え、現実から逃避せぬ人間になることである。そうして平和な心で死に臨める人間になることなのだ。幸福な人間とは、自分自身とも他の人間とも調和して生きることのできる人間、自己の人生の中に措定されたもの、つまり神と調和して生きられる人間である。」

ここでは、宗教的な教義の理解という視点ではなく、徹頭徹尾その宗教的人格の基盤形成に着目している。その核心は、神と人と調和して生きられる自由で自立的な人間になる基盤づくりにある。このことは、ことさらに宗教心という固有領域を例外的に考えるのではなく、乳幼児期の人間形成そのものと軌を一にする視点でもある。その要旨は、両親・兄弟・他の身近の人々と情緒的に結びついた関係を学習することで、基本的信頼関係・基本的人間関係の形成を図ることにある。

5 幼児期における宗教での二つの仮定

前項の宗教教育の目的をふまえつつ、そこでの基本的な視点や具体的な内容を考えてみる。すると、標題のような二つの仮定がその支柱として考えられる¹⁰⁾。

その第一は、宗教教育はだいたい子供が話すのを学び出すときに始まるということがあげられる。また第二は、言葉による教養で事のなりゆきを支配し、言葉と行為でそこから出てきたものを支配することが宗教を教えたことになる

との視点である。ここでは、それを始める時期を選び、何を、どのように教えたいかを決めそれから始めることが肝要となる。

ここでのキーワード(鍵となる語)として動的自己(the dynamic self)を考えることが有効に思われる。このとき、子どもの動的自己の支配原理との関連で概むね次の仮説を考えることができよう。¹¹⁾「幼年期と児童期における個人の情緒的生活によって、のちに彼が応答し、自己のものとする宗教の種類がきまる。」(これについては、後述の二種類の信仰の項で考える。)

このことは、幼児に直面する動的要因が彼の外部にあり、これが彼の内部に動的自己を造り上げることを意味する。そして、これらの動的要因はまず両親をとおして彼にくるのが普通と考えられる。このとき、これらの動的要因が最も簡単でまた最も強い形で、愛と憎しみの中に見い出すことができるといえよう。すると、その核心について「乳児が愛に会うとき、彼は神に出会っている¹²⁾」と考えることができる。

この視点に立ちつつ、ここでの神との出会いや神への信頼を形成するその土壌を次に概観しておきたい。

6 信頼の心の育成

赤ん坊には生来的なものとしての信仰心はないのであろう。しかし一方、不信心ともいえないであろう。乳幼児期の宗教的感受性の基礎の形成もまた、その人格形成と同じように子どもが愛情ある養育をうけるか、それとも冷たい扱いをうけるか、換言すれば喜ばれる存在として育つか、邪魔者扱いされる立場に立つかに左右されるといえよう。

前項の視点に立つならば、「子どもにとって、神さまとは最初母親のことに他ならない¹³⁾」といえる。つまり、乳児は無抵抗の状態にあり、全能の神の存在を母親が代替していることを意味している。たしかに、人間は孤独な存在であるが、乳幼児期にいつもだれかがついていてくれるという安心感において、根源的信頼感が形成されるのである。

したがって、この間の概要はおおよそ次のように表現することができよう。乳幼児が快適な毎日を過ごし、暖かい保護をうけつつ生の喜びを肌で感じることができるならば、自分を創造した神は自分を愛しているという宗教的感情を受入れる素地に恵まれることになる。一方、このような乳幼児体験に欠ける者は、愛の神の思想を受入れることに困難を覚えることになる。このようにして、子どもが成長の最初の段階において何よりも必要とするものは、このような安心感をうるための両親を中心とする暖かな情緒的結びつきである。このとき子どもは健全な生感情を発達させ、自分の全運命を、たとえそれが苛酷なものであっても、肯定しうる力を養うことができるといえよう。

7 二種類の信仰

先に、幼年期と児童期における個人の情緒的生活によって、のちに彼が応答し、自己のものとする宗教の種類がきまる、との仮説を提示した。本項では、このことについて概観しておきたい。

子どもが宗教の世界と接触して、これに反応するとき二種類の信仰が形成されることができよう。その一つは、その子どもを神に向かって開かせるゆえに、子どもの成長を促進する信仰である。これは、おとなになってから豊かな完成・成就へと進む、霊的な成長の土台を造り上げるといえるものである。

第二は、最も痛切に神を必要とする自己の領域を封鎖するような機能を果たすゆえに、成長を阻害する信仰である。これは、成長もなければ歓喜も生み出さない、ゆがめられた形でのキリスト教的な物の考え方や、不安定な信仰生活の土台を造り上げることになるともいえる。

これらについては、キリスト教信仰の視点との関連で、またこれまでの記述との関連で考えるとき、概ね次のようなことがいえるであろう。

前者については、子どもが暖かい、真実な親の愛に出会い、親の人生観が、神の愛と信頼の応答を呼びますようにイエス・キリストを提示するなかで、

神の国が心の中で確かなものとされるときに生起する。一方、後者については、親と子どもの関係がきわめて不安定であるとき、健全な良心の発達が阻害されやすく、そのときには良心の欠如や過敏、もしくは柔軟性のない良心となりかねない。このとき、いわゆるしりごみ状態を生起するのである。

8 信仰とは何か

前項の心的世界をより明らかにするためにここでは信仰とは何かについて考えておきたい。そのためには、まず存在には二つの秩序があることに着目することが肝要となる。一つは、地上的なものとしての歴史とよばれるものがある。この特色は、一時的であり、終わりがやってくる点にあり、キリスト教信仰の視点からいえば神に服従しきっていないと考えられるものである。

二つ目は、天とか天的とよばれる宇宙的で普遍的な秩序の世界である。ここでの特色は、永遠的であり神に完全に服従するというものである。

このことについては、聖書信仰が啓示する教義的理解が若干なりとも必要となろう。その核心は、イエス・キリストが神の姿・像であり、イエス・キリストが十字架ではらった自己犠牲は、人類の罪の赦しとしての永遠のあがないを啓示し、このことで神の臨（共）在における永遠の生命が信仰的現実になる心的世界である。

このことをふまえたとき、ここでは信仰を次のように表現することができ¹⁵⁾る。「信仰とは永遠の生命の現実的本質で、一時的な歴史的秩序のうちにあって現在この場で味わうことができ、肉の目にはまだ見えない事がらについての、実際上の証拠を与えるものである。」

したがって、その要旨は、人間が時間の中に生き、まだ自然と歴史の中に閉じ込められていながらも、すでに永遠の存在秩序の中に実際に、また真実にはいるのに用いられる手段ともいえる。このことにより、人間は神の姿としてのイエス・キリストにおいて啓示された神に向かって開かれ、あわせて時間と空間をこえた生の秩序の本質・現実性である信仰をとおして、永遠に向かって開

かれているといえるのである。

本小論のテーマである幼児の宗教心との関連で考えるときには、これらの信仰を教義を中心とした知的レベルで理解・習得する前段階として、幼児の生活体験レベルにおいて、実感することが大きな課題となる。次の項でこのことを考えてみたい。

9 遊び・お話・信仰

幼児の思惟形式の特徴は、すべてを具象的に表象する点にある。したがって、幼児の宗教心の涵養もまたより具体的な内容においてその実があがると考えられる。この内容を次の三点から概観する。¹⁶⁾

第一は、遊びの真理の側面である。欧米では復活祭に卵をもってくる兎の遊びがある。これが事実ではないことに子どもはいずれ気づくが、おおよそ才位までは夢中になってこの遊びに興ずるという。これは遊びの世界に浸ることで、その想像の世界を体験することを意味するのである。

第二は、童話や昔話などによるお話の真理の側面がある。赤ずきんや狼などは、話の中の主人公であるが、幼児には現実の存在として体験される。後年、成長にともない現実性を失うことになるが、そのお話（物語）の世界に共感することでその深い意味を知ることになる。

第三は、信仰の真理の側面がある。たとえば多くの教会の壁にかかっている聖画が表現している真実の世界がある。こうした絵に対して、単なる事実としてではなく神の真実としての宗教的認識へと幼児を導くと考えられる。

すると、これらの三点を総合するものとして、聖書の物語がクローズ・アップされることになる。旧約聖書においては、アブラハム、ヤコブ、ヨセフ、ダビデの物語をはじめ数限りない。これらはみな、古い説話術の直観性に富み、色彩豊かで劇的な生命力にみちているのである。新約聖書では、待降節とクリスマス、復活祭の物語、サマリヤ人の話、放蕩息子の話やザアカイとイエスの出会いなどやはり数限りない。

ただここでイエス・キリストの十字架における磔像を目にする幼児への対応も忘れられてはならないであろう。このことはキリスト教信仰のまさに中核部分でもある。受難史の物語として、また信仰の真実として次のような思考の筋道を押さえておきたい。¹⁷⁾

「神はわれわれを愛している、だからわれわれ人間を見捨てずにイエスを送られた。イエスはマリヤとヨセフの子として馬小屋に生まれた。成人した彼は病人を助け、盲人をいやした。神を知らぬ貧しい人々のもとにゆき愛を説いた。悪事を働いてみなにそっぽを向かれている者たちのところへゆき、神のゆるしを告げた。しかしこれらを不快に思う者たちがいた。彼らはすべてが古い秩序のままであることを望んだ。そこで彼らはイエスを告発し、ひどい仕方で殺してしまった。しかし彼らは彼のそばに神がついていることには気づかなかった。イエスは甦えり、われわれの目に見えない道連れになった。だからわれわれは彼と語ることができるのである。この世においても死後も、われわれは慰めを受ける。だから彼が愛のゆえに死んでいった姿を絵や彫刻に示すのである。そして、だからわれわれも互いに愛そうとつとめるのである。」

したがって、この項のまとめとして、子どもの成長段階に、宗教的な話をすることを学ぶのを逸してはならぬ時期があるといえよう。¹⁸⁾つまり、幼児期に最初はわけのわからぬことをしゃべっているように聞こえることが多いとしても、この時期にする話す練習が後の成長にとってかけがえのないものであることは、よくわれわれが承知しているところのものである。よって、宗教的な事柄についてもおおよそ4才から8才ごろまでに信仰、信心といったものに親しませ、その素地を育むことが大切といえる。そして、ここでは何よりも絵や童話（お話）、遊びが有効であることに着目することが肝要である。

10 幼児の宗教心の故郷

これまでの記述をふり返るとき、後年に成長した証として自覚的な信仰告白をするためには、その幼児が宗教心のいわば苗床として安心できる心の故郷を

もつことが何よりも大切であると考えられる。

キリスト教信仰では次のような祈りがある。¹⁹⁾「主があなたを守って、すべての災を免れさせ、またあなたの生命を守られるように。主が今からとこしえに至るまで、あなたの出るとはいるとを守られるように。」これは、既にみた幼児洗礼時の祈りと同質のものでもある。

ここには、親がわが子を庇護する思いや祝福する心において、ひたすらに祈る世界が表明されている。このように、親や養育者などが自ら目を神に向け、わが子の成長もまた神と隣人に祝福されたものとなるように祈る姿の中にこそ、幼児の宗教心の故郷があると考えることができるのである。

11 学生の感想や意見

この度の私の講義を受講した学生に、授業の感想や意見を書いてもらった。概ね21才という若い世代の彼女たちの考えを知る良き機会でもあるので何名かの分をここに掲載させてもらうこととした。

私は、2才の時に幼児洗礼を受けているので、幼稚園の時、教会に通っていた記憶はありますが、自分が宗教やキリスト教、そして神様をどのように考えていたのかは覚えていません。ただ、いつでも物が欲しい時や病気になった時、食前などいつも神様にお祈りをしていたことを覚えています。お祈りをしていたことを思うと、神様がいるということを前提としていたことが分かります。私は幼児洗礼を受けていますし、教会にも通っていたので神様を信じていましたが、きっと教会に通っていない子たちも、神様を信じていたのだと思います。きっと誰もが祈りをした経験があるのだと思います。子どもが目に見えない神様を信じてお祈りすることは理論では言えないことで、イメージ的なものです。先生のお話を聞いて、子どもの宗教性は理論的なものではなくてイメージ的なものなのだ、ということを知りました。

私は、幼い時日曜学校に通っていたし、キリスト教保育の幼稚園で実習し、またキリスト教保育をしている幼稚園に就職を希望している。しかし全くキリスト教保育（宗教教育）のもつ意味を理解できなかった。ただ漠然と感じていたのは子どもの時から「神様が見ていて下さる」という思いが、私を頑張らせたり救いとなった時もあった。子どもの時、どうして母が私を日曜学校に通わせたのかはわからないが今となってはとても感謝している。アラブの詩句で、子どもを私物化してはならないという部分があったが、それにもかかわらず親から子への宗教心の影響は大きい。大人になってからより子どもの方が素直に宗教にたずさわれることができるのを考えると親に頼らざるをえない部分ではないかと感じた。アラブの詩句を読むと改めて子どもを限らない未来に包まれた存在なのだと感じた。そしてその未来への送り手が私も含んだ大人たちなのではないだろうか。

私は、カトリックの幼稚園に通っていましたが、クリスチャンではありませんが、毎日朝と帰りに教会でお祈りをしていたので、無意識の中に神の存在を信じています。子どもと接する全ての人がアラブのある詩句のように子どもの命を私物化しないという意識を持てれば、子どもにとってもっと生きやすい世の中になるように思います。保育者として接する私は、子どもが自己肯定感を持って、たとえ苛酷な世の中でも生きていけるように願って、子どもと接していきたいです。

私は、小学生の時、毎週教会に通っていましたが、教会に行く意識よりは、仲間やシスターに会える楽しみが先でした。今、心に残っていることは、「いつも神様が見守っていて下さるということ、祈りを聞いて下さる」ということを、シスターが真剣にそして優しく言っていたことです。宗教に限らず、子どもは身近な大人の影響を受け易いと思います。そのような子ども達が、何らかの心の支え、生きる糧を得るのは、間違いなく大人からでしょう。言葉で、愛をいくら説明しても少ししか通じないと思います。講義でもあったように、ま

ずは両親が、子どもの心の故郷は親の祝福であることを自覚し、子どもに安らぎと信頼する心を与えていくべきではないでしょうか。人を信じることができた時、そこには愛があるということになり、同時に神がいるということになると思います。私がキリスト教を知り、理解するにあたり、幼児讃美歌、宗教紙芝居等が役に立ちました。幼稚園において子ども達と一緒にこれらを考えていくことは喜びでもありました。

私は実習をした幼稚園と保育園がキリスト教主義の園だった。ここで食事に対してや、登園して元気に遊ぶことに對し感謝して祈りをささげ、欠席している子を守っていただくように祈ったりする生活を3週間することによって、自分が今までこのような当り前のような日常のことに對し心をこめて感謝したことがあるだろうか、と気が付かされた。今日の授業での先生の話聞いて、食べ物を大切にすることや命に感謝することが、それまでの私にとっては知的理解でしかなかったのかもしれないと思った。保育園でも食前の祈りをしていたが、3才児になると保育者が毎日唱える祈りを真似したり、2才児でもおまごとの中で祈っていたりする姿もみられた。乳児であっても、感謝の心が確実に伝わっているのだと実感した。また、宗教心とは、日常の生活や生きている原点に對し感謝することであって、いたずらにすがつたり、知識や理屈を教えこむことではないのだと実感した。

宗教というものは、子どもに知識や理屈で伝えるものではないということがよく分かった。子どもの宗教心を育てるには、絵本や童話などによって、想像的に獲得していくようにするものだ分かった。子どもたちが、神に出会うためにも親や養育者の愛が必要である。先生のお話しされた、親として出来ることは「傍らに立つこと」であるとのことはすごく大切なことであると思った。常に、「お前と一緒にいるよ」という気持ちは、子どもに安心感を与え、大きく伸びていく原動力となるであろう。また、「気持ちを共感する」ことも、子どもが自己肯定感をもつことにつながり、自信にみちた立派な人間に育つことが

できるであろう。これは親だけでなく、保育者にもいえることだと思う。将来、私が保育者になった時、子どもたちの傍らに立ち、大きな愛で子どもたちを支えられたらと思う。

お わ り に

ここに若干の考察をしたが、その多くを掲載した文献によっている。省みて、私自身も約10年ほど、幼児や学童に教会学校で聖書のお話（小説教）を含めた礼拝をささげてきたので、もっと実践的な考察が為されるべきであったとの悔いが残る。ただ、私の小さな実践を念頭におきつつ、共感できる部分を抽出して、論理的な整理をひとまずまとめることができた点でそれなりの意義をもつとも考えている。それにしても、保育を考える際、もっと幼児の宗教心の涵養に着目する必要があると実感している。さらに、多面的で掘り下げた考察をしたいと願う昨今である。

注

- 1) 1999年度履修要覧では「子どもを知り自分を知る」のテーマの下、「子ども」という基本テーマのもとに多様な観点から教師各自の問題提起が行われます。歴史・文化・芸術・音楽・文学・諸学科の窓口から見える子ども像と子どもをめぐる現代の問題が論題となります。と記されており、学科の全教員が参加し講義や演習、共同討議などで実施される。
- 2) 日本基督教団正教師（牧師）。現在は無任所教師。
- 3) 1999年10月5日に実施。
- 4) 筆者は約10年間、教会学校で幼児・学童と交流したことを基盤に考察を加える。
- 5) 日本基督教団讃美歌委員会編集『こどもさんびか』日本基督教団出版局、1993
- 6) 全国社会福祉協議会養護施設協議会『養護施設ハンドブック』全国社会福祉協議会、昭和56、P 347～P 360（発達段階表による）
- 7) イェルク・ツィンク、ハイディ・ツィンク、内藤道雄訳『幼児の心との対話』新教出版社、1975、157～158 頁

- 8) 同上書 18頁
- 9) 同上書 15頁
- 10) L・J・シェリル, 気仙三一訳『神との出会い 宗教的生の心理学』日本基督教団出版局, 1985, 65頁
- 11) 同上書 66頁
- 12) 同上
- 13) シェリル: 前掲書 23頁
- 14) 同上 76頁
- 15) 同上書 33頁
- 16) ツィンク: 前掲書 136頁
- 17) 同上書 145頁
- 18) 同上書 128頁
- 19) 旧約聖書 詩篇 121篇 7～8 節

なお, この他の参考文献として次のものを挙げておく。

J・H・ウェスターホフ, 奥田和弘・山内一郎・湯木洋一訳『子どもの信仰と教会 教会教育の新しい可能性』新教出版社, 1981

